

「私の上に降る雪は…」

校長 土屋 靖雅

今年も冬が来た。雪は静寂の世界へ我々を誘（いざな）う。美しい白銀の情景は、見ている者を魅了する。全てを包み込むように降り積もり、重なり、そして覆い隠す。時には、自然の前において人間が無力であることを知らしめることもある。自然への畏敬の念を感じずにはいられないものである。

昔から多くの詩人やアーティスト達が、それぞれの想いを「雪」に託した作品を残している。詩人の三好達治もその一人である。三好は「雪」と題して、

太郎を眠らせ、太郎の屋根に雪ふりつむ。

次郎を眠らせ、次郎の屋根に雪ふりつむ。

と、二行だけの詩を残している。教科書等にもよく載っているの、目にしたことがあるかもしれない。たった二行ではあるが、故に想像をかき立てる。雪が降り積もり、雪に覆われた世界で、屋根に守られ眠る姿には、温かみすら感じる。奥深い詩である。

同じく詩人の吉野弘は、「雪の日に」という詩の一節で

…雪はひとたび ふりはじめると あとからあとから ふりつづく

雪の汚れを かくすため…

と詠っている。こちらも合唱曲として有名なもので、曲とともに触れたことがあるのではないだろうか。「汚れ」を「かくす」ために、降り「つづく」という言葉に、ものごとの本質を問い掛けられている気がする。考えさせられる詩である。

古くは、和歌にも雪は詠まれている。現代のアーティストも、雪を題材にした名曲を多く生み出している。皆さんも、心を奪われたお気に入りの曲があるのではないだろうか。そこには、雪の白さが持つ美しさへの憧れや、解けて消える儚さへの共感、経験から導かれた価値観の共有、まだ見ぬ新たな世界の発見などが存在する。何気ない日常に彩りを与えてくれる。

歌や詩だけではなく、自然の情景の美しさや素晴らしさを表す言葉として「雪月花」というものもある。音の響きも美しい。同じく、「風花雪月」という四字熟語も存在する。四季の移ろいや風流で優美な景色を表した言葉である。「螢雪之功」というものもある。これは、貧しくて灯りが買えない環境においても、螢が放つ淡い光や雪の白さに反射する光を利用して必死に勉強した、という中国の古い話に由来した言葉である。苦勞して学問に励む日々を重ね、努力が報われて成果を出すことを表している。

この言葉の意味を聞き、思い浮かぶ歌詞があるのではないだろうか。卒業式でよく歌われる「螢の光」である。努力を重ね立派になった生徒達が、楽しかった学校生活という時が「すぎ（過ぎ）」で、別れの時を迎える。そして、「すぎ（杉）」の扉を開き、それぞれの未来に向かって、別れて行く。その未来に幸多からんことを詠った惜別の歌である。雪には多くのイメージがある。雪解けの先に訪れる「春」への期待や、そこで訪

れる出逢いと別れの感情も、私たちの心を揺さぶる要因なのかもしれない。

さて、「みぎわ」が皆さんの手元に届き、この文章を目にする頃には、三年生との別れの時を迎える。三年生は、同じ時を同じ空間で過ごした仲間との別れの時である。今年も、多くの三年生が卒業と同時に、地元から旅立つことになる。愛する家族や慣れ親しんだ地元との別れの時でもある。皆さんは何を想い、卒業の日を迎えるのだろうか。

三年生だけではなく、在校生もいずれ別れの時はやってくる。全生徒にとって、学校や地元が「居心地のいい場所」である（あった）ことを願っている。当然、全てが上手くいくとは限らない。嫌な思いをすることもある。それでも、当たり前のように日常は巡り、その中に幸せは存在している。当たり前すぎて気付かないだけなのかもしれない。そして、当たり前だと思っていることが、実は当たり前ではなく、とても貴重で大切なものであるともいえる。なくして（離れて）から初めて分かることがある。私も痛感した一人である。思い出は、優しくて美しい。

皆さんにはっきりと言えることがある。それは、皆さんが、多くの人や事柄に「守られている」ということである。守られ愛され大切にされて、皆さんは大人になっていく。

これから先は、思い描いていたものとは違う人生をおくる人もいる。未来はいつでも不完全である。だから楽しい。創造するのは君たちなのだから…。

「置かれた場所で咲きなさい」

この言葉を覚えているだろうか。そして、改めて本校の校訓に思いを寄せてみる。

「和而不同」

もともとは『論語』の一つであり、「君子和而不同 小人同而不和・・・」と続く。「主体性をもつ人は、軽々しく他者に同調することはないが、主体性がない人は、他者と同調するだけで、協働することができない」という意味となる。

現状を嘆くばかりでは何も生まれない。他者と馴合い迎合するだけの毎日では、心の安らぎを得ることはできない。自分に嘘はつけない。

皆さんには、これから訪れる、未知なる世界で「幸せな時間」を過ごしてほしいものである。そして、自分なりの「居心地のいい場所」に出会えることを期待している。

今日も小雪が舞っている。しかし、雪に包まれた世界は永遠ではない。明けない夜はないのである。

長万部の雪が解け、新たな命が芽生える頃に、それぞれが、それぞれの人生の新たなステージに立っている。